

巻 頭 言

も っ と 議 論 を

理事長 松 野 太 郎

前期から学会大会における研究発表のあり方について検討を続け、今年の春季大会で新しい方式の試行を実施することになりました。

これまで大会の折に、また天気誌上で説明して来ましたが、新しい方式は、毎回、特定のテーマをいくつか決めて、シンポジウム（分科会）を行うこと、シンポジウムでは基調講演・一般講演（研究発表）ともに十分な時間をとって相互の議論が噛み合うようにし、また参加者との討論にも時間をとろう、というものです（いさゝか欲張り過ぎで、簡単には目論み通りにならないかもしれませんが）、要するにもっと議論をしよう。学会講演を単なる作業の報告でなく、問題について論（主張）を展開するものに行おうということです。

今回の「改革」の直接の動機は、講演時間が余りに短過ぎる、ということでした。しかし、現在のような短い講演が多くなってからかなりの期間が経過しましたが、「短過ぎる」との声が非常に多くあった、というわけでもないように感じています。私のみる所では、理事・講演企画委員などの間では問題になっていたものの、大学院生など若い会員の間で大きな不満が出ていたように思えないのです。その理由を自分なりに考えてみると、学会発表とはこういうもの、と最初から思いならされていたという事があるかと思いますが、それと同時に、その事に疑問を持たない、不満に思わない、という状況があったように思うのです。若い会員にとって学会発表とは、「自分はこういう事をしています」という事を皆に伝えられれば、また、仲間が何をしているかが知れば、それで十分なものであったのではないのでしょうか（これを「自己紹介的発表」と私は呼んでいます）。

確かに学会は同一分野の研究者の情報交換の場という機能を基本としていますが、それとともに異なる意見をぶつけ合って各人の研究を深め磨き上げる、という事も重要な機能です。実際、学会の機関誌、気象集誌の投稿規定には、投稿論文は学会で発表されたもの

であること、とあります。すなわち、学会は研究発表を専門家集団によってチェックする場であると考えているのです。このような目的と機能に対して昨今の「7分間講演」が有効に働いていない事は明らかです。このため、新方式では講演時間を長くして研究の詳細がわかるようにし、また討論も充分に行えるようにしようとしているのです。

しかし時間を長くするというだけでは目的は果たせません。当然のことながら、相手に対して鋭い質問を浴びせたり、異なる意見をぶつけて活発な議論をくり広げる、という事が出来なければ折角の新方式も意味をなさないのでありますが果たで大丈夫でしょうか。「近頃の若い者」に対してこのような心配をするのは私ばかりではありません。少し前、東京大学教養学部のカリキュラム改革に付随して同学部の教官陣が作った「知の技法」という本がベストセラーになり話題を呼びましたが、その著者達の発言の一つで「うなずき合いの18年」というのが印象に残っています。その意味は、日本の社会全体で協調性が強調され、集団の中で異質の言動が嫌われるため、多くの若者は異質の発言はなるべく抑え、お互いにうなずき合って大学に入るまでの18年を過ごし、「同意の技術」を身につけて来ているということです。このような若者達に如何に議論する習慣をつけさせるか、が教官陣の問題であるわけですが、学会での討論を盛んにしようという今回の試みに関して同じような心配をしてしまうのです。

先に書いたように、学会での発表・講演は話す人の考えを皆に伝える為だけにあるわけではありません。それをきっかけとして、参加者と議論をたたくことにより、問題についての全員の認識を深めてゆくことに意義があるのだと思います。そのためには、壇の上からの発表と同じく、壇の下からの反論や疑問の提出が重要です。人の言う事はみな間違いだと思って反論を企てましょう。協調性や柔軟性は討論の場では美德ではなくマイナス要因です。学会発表のために準備をしたりするのと同じ熱意とエネルギーをもって議論をして下さい。